





写真2 自宅栽培のデンジソウ 2001. 9. 26

水槽にはデンジソウのほかに、ヒメスイレン、イヌタヌキモ、ウキクサ、アオウキクサ、サンショウモを同居させておくが、いずれも、生育旺盛で、増えすぎたものは、取り除いている。

デンジソウは、ただ水生のシダというので興味を持って栽培はじめ、十数年間も同じ水槽内に育てているが、毎年生育は良好で、その生活力、増殖力は旺盛であるのに驚く。

そんな生命力、増殖力の強いデンジソウが、野生状態で生育できず自生地がなくなり、絶滅危惧種となったのはなぜかと思う。

宅地工場用地造成のための埋め立てによる湿地の減少、水田の土地改良による乾田化、区画整理などデンジソウの生育できる環境が失われたことが第一の理由であろう。

水田雑草駆除の除草剤使用も理由に上げられているが、その影響はいかほどのものであろうか。

デンジソウは、北海道から九州まで全国に分布するが、水田や池沼、湿地が開発されて、デンジソウの生育する環境が失われていく状況も、全国的に進行しているのだから、各地で消滅があいついでいるという。

残念ながら、県内のデンジソウは、野生絶滅となってしまい、自生地保護ということができなくなった。

今まで、デンジソウを、ちょっとした物珍しさから育ててきたが、県内最後の自生地の生き残りということになり、出所のはっきりしている種の保存、という意味も持つようになった。

今、育てている県産のデンジソウ、絶滅危惧種、野生絶滅の種を消滅させないために、育てることを続けていきたいと思っているし、野外で生育する場を何とかつくりたいと試みてもいる。そのほかに、これまでに、栽培に興味をもってくださった人に分与した。

デンジソウを栽培する人が、もっと多くなって欲しいが、園芸的に観賞価値のあるものではないので、期待できないし、個人の栽培ではいろいろな問題があり、限界がある。できることなら、野生状態に近い環境で永続的に生育できればいいのだが、デンジソウの生育できるのは、人の手が加わることで維持される半自然な環境であるならば、そうした生育環境を維持していくのは、現状ではきわめて難しいであろう。

公共の博物館、植物園という機関に、絶滅危惧植物を育てる、保存栽培するというのが、一つの機能として組み込まれてほしいものである。

〈追記〉1) デンジソウの孢子からの増殖、まだ確認できないでいます、ご教示ください。

2) デンジソウを栽培してみたい、あるいは、生育できるような環境で移植可能な場所がありましたら、ご連絡ください、株分けいたします。

## 新 潟 日 報

2003年(平成15年)2月14日(金曜日)

亀田郷の人たちが泥田と格闘したように、新潟市民は砂と闘ってきた▼「砂丘を滅ぼさずんば砂丘、新潟を滅ぼさん」。明治時代後半の新潟新聞の記事は決して大げさでない。強風の後ほ細や家屋が砂で埋まるほどだった。飛砂を防ぐため江戸時代から松やケミを植えたのが西海岸公園の松林である▼都市の生命線の松を伐採して市は二二併幅の道路を造るのだという。ちょっと待てよ、と言いたい。松林は緑が少ない市内にあって、最大の公園で憩いの場となっている。緑を守るといふ以前に、利用度からみて必要な道路なのか疑問だ▼住民の一人、沖野森生さんは「市民が育ててきた遺産を何でつぶすのか」と素朴な疑問を持つ。沖野さんは小学生のころ松を植えた思い出があるという。西海岸では明治時代から小学生らが植林をするなど並々ならぬ努

**日報抄**

亀田郷の人たちが泥田と格闘したように、新潟市民は砂と闘ってきた▼「砂丘を滅ぼさずんば砂丘、新潟を滅ぼさん」。明治時代後半の新潟新聞の記事は決して大げさでない。強風の後ほ細や家屋が砂で埋まるほどだった。飛砂を防ぐため江戸時代から松やケミを植えたのが西海岸公園の松林である▼都市の生命線の松を伐採して市は二二併幅の道路を造るのだという。ちょっと待てよ、と言いたい。松林は緑が少ない市内にあって、最大の公園で憩いの場となっている。緑を守るといふ以前に、利用度からみて必要な道路なのか疑問だ▼住民の一人、沖野森生さんは「市民が育ててきた遺産を何でつぶすのか」と素朴な疑問を持つ。沖野さんは小学生のころ松を植えた思い出があるという。西海岸では明治時代から小学生らが植林をするなど並々ならぬ努

1 総合 12版

(昭和16年7月30日第三種郵便物認可)

(日刊)

力をしてきた。航空写真で見ると、西海岸一帯の松林は公共施設や団地などの建設でやせ細って痛々しい▼その中で計画部分の松林は最も厚みがあり緑が多く残っている所でもある。「これは道路を造ることで新潟をよくするの、松林や緑を守りはぐくむことで魅力ある街にするのかの問題」というのは新潟大学工学部の寺尾仁助教授。道路計画が決まったのは三十年以上も前だ▼いまだに車優先の発想では寂しい。公共事業について寺尾さんは「かつて引いた線を消そう」と主張する。不要な線を消すことは都市計画の重要な要素であり時代に合っている。西堀、東堀など堀を失った痛い教訓はどこへいったのだろうか。篠田昭市長の「仕切り直す」という発言を見守りたい。